子どもにとっての仲間の意味について考える

中島　寿子

保育の場では、よく「お友達」「仲間」等の言葉が聞かれる。そして「仲間なんだから云々」と言われることもあるようだ。しかし、そのようないわゆる「仲間」は子ども達にとってどのような意味があるのだろう？

ある幼稚園の子ども達との出会いによって、私はこのことにこだわってみたいと思うようになった。

「Tが休みでよかったな」

この子達が年長に進級した際、クラスのメンバー

はそのままで、担任のみが変わった。私は年少(四歳)の時もこのクラスにお邪魔していたのだが、二か月以上間をあけて久しぶりに来てみると、何だか変な感じがする。それは担任になったA先生も同じである。

新学期が始まったばかりの四月、A先生は男児達の会話に驚く。「Tが休みでよかったな」と言い合っているのだ。驚いたA先生が「どうして?」と聞くと「だっていじめるから」と言うのである。そして、そのTが遊びに入れてもらえないということも目につく。

事例1　五月二十八日

保育室の中央にKを中心として、Y、S、U、M、Hが積木で大きな二階建ての「宇宙船」を作り、その中にもぐり込んだりして楽しんでいる。

Dはゴザや積木を持ってきて、一人で別の場所に自分の基地を黙々と作っている。

Tは「宇宙船」の周りをウロウロする。「宇宙船」の中にいる子達が積木の隙間から外をのぞき「あ、Tが見えた」と言うと、Tはニッと笑って「宇宙船」を外から足で激しくドンドンと蹴る。すると、「やめろよ!」と強く言われてしまう。

＊

「宇宙船」から出てきたYとUが戦いごっこを始め、そこにTも入る。どんどん「宇宙船」の子達が入ってくるので、戦う順番をジャンケンで決め、勝った子から順番に一対一の勝負を始める。しかし、そこにKもやりたいと入ってくると、戦いごっこは中断となり、もう一回最初からジャンケンのやり直しとなる。

Kの思いのままになるのが気に入らないTは、Kの体をグイと押してジャンケンに入らせない。すると、Kは「なんだよ、いいじゃないか!」と言い、

みんな黙ってしまう。Tは「もういいよ。みんないいもんでいいから。それのがスッキリするよ。やろうよ」と言うが、みんな「宇宙船」に戻ってしまう。

Tは「宇宙船」の側にきて「じゃあ、このおうち、壊してもいいのか」と「宇宙船」の二階に座ったYに言う。

＊

そこにA先生が戻って来る。YはA先生に「Tが壊すっていう」と言う。先生は「本当に壊すんじゃないでしょ。壊すって言ってるだけでしょ」と笑顔で言う（内心戸惑っていることが感じられる）。

Tが黙っているので、「T君、いやなことがあったの？　仲間に入りたいの？」と聞くと、「T君も作れば？」というA先生の言葉で、Tも一人で基地を作り始める。

Tの基地が随分できた時、Kは自分の「宇宙船」の二階にHと立ち、「こっちの方が高いな」と満足気に言う。

Tについて

Tについては私も年少の頃から気になっていた。周りの子とのやりとりを見ていると、言葉で表現するのは難しいが、違和感を覚えるのである。なんだか思いが通じ合わないことが多い。そして、思いが

通じない時はもちろん、彼にとっては挨拶がわりなのか、いきなり大声を出したり乱暴に振る舞ったりということもあった。本当は繊細な所があり、まだ幼い部分も多いTなのだが、このようなことから次第に「強い子」「こわい子」と見られていったようだ。

Tは「仲間」の象徴である基地やお家に無理矢理入ってトラブルになることも多かった。Tとしては、その関係の中に入っていきたいという思いがあるのだろうが、Tの思いが伝わらない相手の子からすると、自分達のところに関係ないのに何で入ってくるの？　となる。

私の感じていた「違和感」を周りの子もTに対して感じていたのではないだろうか。そしていきなり乱暴な行為に出るため「いじめる」という見方が固定し、受け入れてもらえないイライラをTはまた乱暴な行為で表し「ほらまたTが」と言われるという悪循環になってしまったようだ。

Tは事例1の言葉にもある「いいもん」「わるいもん」を年少の時にも口にしたことがあった。自分がみんなからどう見られているかをTはTなりに感じていたのだろう。自分が「わるいもん」でもその方が「スッキリ」すると言うTを見ていると、とても切なく苦しい気持ちになる。

Kについて

男児がKを「一番隊長」にしてKの指示通りにかたまって遊ぶことが多いことも、A先生を悩ませていた（A先生はこの状態を「団子状態」と呼んだ）。

Kは体も大きく力も強い。一人っ子で大人の中で育っているので、言葉も達者で親分肌。他の子達は第二子、第三子なので兄と一緒に遊ぶ感覚で楽しん

でいるのかも知れない。しかし、Kに自分の意見を言うと「誰が一番隊長だと思ってんだよ」と言われ、それ以上何も言えないという姿も目につく。魅力的なおもちゃがあるKの家に子ども達がよく遊びに行っていたことも関係あるのかも知れない。

Kは入園当初、幼なじみの女児と二人だけで遊ぶことが多かったのだが、だんだん自分が出せるようになってきたという経緯がある。

Kの一番隊長へのこだわりは、そのことでみんなから認めてもらえているという実感があったからではないかと思う。「一番隊長であること」で自分の言いたいことを言い、それを受け入れてもらえるということは、Kが自分の存在感を確認するために大事なことだったと思われる。そしてTはそれを脅かす存在だったようだ。

このように考えていくと、TのこともKのことも、もっと丁寧に見ていく必要があったのだ、私は一体子ども達の何を見ていたのだろう、とTの辛い状況を見るたびに悔やまれ、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていた。

A先生の思いと援助

「団子状態」で遊ぶ子ども達の様子を見てきて、本当に自分のやりたいことなの？　遊びたい人なの？とA先生は感じていた。

A先生のいう「団子状態」の子ども達を見ていると、同じ場にいること、同じ遊びをし、同じ動きをすることで「みんなと同じである自分」に存在感を感じていたように思われる。クラスのメンバーは変わらなくても、進級し環境が変わる中で、彼らなりに自分の存在感を確かめる必要があったのかも知れない。

TやKにどう対応するかということはもちろんだが、周りの子をどう育てるかということが大切だとA先生は考えていた。「自分のしたい遊びを、本当に遊びたい友だちと一緒にしてほしい」「自分の思い・考えを伸び伸びと表現できるようになってほしい」という願いから、一人ひとりの子がやり始めた遊びを支え、遊び自体が楽しくなるように、素材・道具の準備をしたり、自分も一緒に会話を楽しみイメージが広がるようにしてみたりした。

そういう試行錯誤を続ける中で、好きな遊びの中だけでは限界があると感じると、一人ひとりが自分の思いを出せるように、一人ひとりのよさに気づくようにと、いろんな活動をクラスの活動として取り入れていった。その中で、おとなしいと思っていた女児がみんなの前でしっかりとした声で歌う姿に感心したり、「一番」と思っていた子が苦戦していることを簡単にできる自分の力に自信を持ったり、と周りの子や自分の様々な面に気づく姿が見られた。

A先生はTを「入れてあげて」とは言わなかった。事例1のTへの言葉にもあるように、A先生は子ども達に「一人でもいいじゃない」「すてきなことをしてると来てくれるよ」ということを伝え、その姿を認め支えていった。「みんなと同じであること」が大事だった子ども達にとって、これは新たな価値観の提示だったと思う。

その中で、Dは自分のやりたいことを求め、一人その「団子状態」の中から出ていき、自分の遊びを始める。この日も一人で基地を作り、製作にも打ち込む。先生はDにじっくりつきあう。この日、Dの基地にあとからMがやってきたという記録には「ずっと一人じゃないんだと思う」と記されていた。A先生の思いが伝わってくる。

一人になってしまうことの多いTに対してもTが

やり始めたことを暖かく見守り支えていった。その中で、Tも自分への自信を深めていったようである。

Tの変化、Rとの出会い

みんなで製作をしていたある日、Tが柔らかい表情でA先生にもたれかかるという姿があった。このようにTが先生に甘える姿を初めて見たという私に、A先生は「ありがたいことですよね」としみじみと言う。

このようなA先生の支えの中で、Tは随分穏やかになってきたし、相手のために何かをするという今までにはなかった姿も見られるようになり、その姿もA先生は認め、周りの子にも伝えていった。

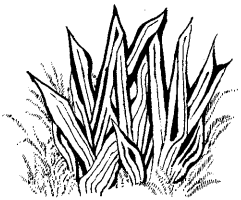
二学期になり転入してきたRとの出会いで、さらにTは変わっていく。

事例2　十月八日

TはRと積木で二階建ての大きな家を作り終わり、家の二階に二人でのぼって座る。TはRに「R、この家気に入った？」と聞くと、Rは「うん気に入った」と答える。Tは満足そう。

津守真先生は、人間が育つということを「存在感」「能動性」「相互性」「自我」の側面から考えられているが、前に私がTに感じていた違和感はこの中の「相互性」をあまり感じられないところにあったのではないか。

津守先生は「相互性は、順番や規則や指図に従うのとは違って、相手と互いに調節し合って動く生命的行為です。それにはまず、



大人が子どもに合わせて応答することが先です。それから子どもが相手に合わせて動くようになります。相互性は、互いに相手に応じて自分を変化させ、新たな関係をつくり出す力です」と述べられている。TはA先生とのかかわりの中で自分を認めてもらい自分の気持ちにそってもらう相互性の経験をし、先入観を持たず受け入れてくれるRと遊ぶ中でもその心地よさを味わったのだと思う。そして「相手に応じて自分を変化させ」ようとする前向きな変化をTの中に感じるようになる。不器用なTが他の子の基地やお家に無理矢理入ろうとすることで求めていたのは、こういうことだったのかも知れない。

一人ひとりの育ち

二学期の後半から卒園にかけてドッジボールへの熱中が続いた。最初はKが中心になって決めていたチームわけにA先生はくじびきを取り入れてみる。やってみるとこれが楽しい。Kも「いい勝負だ」と満足し、その後は「グーチー」で決めるようになって行く。

ドッジボールは一人ひとりがそれぞれの楽しみ方ができ、いろんな子がいることでよけい楽しくなる。この遊びに熱中する姿に一人ひとりの育ちが感じられた。思いきり体を動かし、楽しい経験を重ねていく中で、そのワクワクした気持ちから、ゲームが始まる前からみんなでおどけ合ってみたり、気持ちの高まった子がウルトラマンティガの歌を歌い出すと、みんなで大合唱となったりする。以前とは違い、「ズル」をすると、KやTにも他の子が激しく抗議したりということもある。「大きくなった自分」への自信と「大好きなドッジをみんなでやるのが楽しい」という気持ちがこちらにも伝わってきて、もうすぐ卒園なんだなと思うと、うれしいようなさみしいような何ともいえない気持ちになった。

この頃になると、Tは「いじわるする」とは言われても「いじめる」とは言われなくなる。気がつくと、前はあんなにこだわっていた「だれが一番隊長か」という言葉も聞かれなくなっていた。一番であること、何でも同じにすること等にこだわらなくても、自分がみんなに認められていることが感じられ、友達との気持ちのつながりの中で、より意欲的に自分の遊びに打ち込むようになったのだと思う。一人ひとりの思いがあり、それを他の子とも分かち合えた時に、一緒であることの喜びも物事に取り組む意欲も増す。こういう仲間の中で子ども達はこんなにも輝くということを彼らから学ぶことができた。

冒頭に「子どもにとっての仲間の意味」と書いたのだが、このように考えていくと「子どもにとって」だけでなく、私たち誰にとってもそうなのではないかというふうにも思えてくる。「仲間の意味とは?」という問いに対しても、まだまだ自分の中でスッキリしないことばかりで、当分はこのことにこだわることになりそうだ。

(愛知教育大学)

引用文献

津守真「愛育養護学校の教育」『発達』第三十六巻九号
ミネルヴァ書房　一九八八　p5—6